哲学者の直観は素人の直観より信頼できるのか

稲荷森（いなりもり） 輝一（きいち）
（北海道大学）

1 はじめに

本論文[1]の目的は、哲学的直観に対する経験的批判への応答の一つであるExpertise Defenseを擁護することにある。Expertise Defenseによれば、哲学者の直観は素人の直観よりも高い信頼性をもつため、たとえ素人の哲学的直観が哲学的真理と無関係の要因に影響される信頼できないものであり、真理を十分にトラックしていないとしても、そのこと自体は哲学者の直観も同様に信頼不可能であると考える理由にはならない。哲学と（専門家の判断が信頼されている）他領域とのアナロジーに訴える本議論に対しては、哲学的経験は哲学的直観の産出に因果的に寄与しないため、アナロジーは成立しない、という問題点が指摘されてきた。たしかに見かけ上は、テキストを正確に読み、哲学的問題に関する知識を身に着け、何度も思考実験を行い、そのうえで哲学的議論を組み立てるといった経験（哲学的経験）、つまり哲学の専門的教育と実践（哲学的訓練）を経ていない人であっても、哲学的思考実験についての直観（事例直観）をもてるように思われる。一方本論文では、少なくとも自由意志論など一部の哲学的議論では、哲学的経験はまさに哲学的問題の理解を可能にし、事例直観の産出を可能にするという仕方で哲学的直観の産出に寄与しているため、他領域とのアナロジーが成り立つことを主張する。このことを示すため、本論文では自由意志の実験哲学において近年指摘されている「決定論の誤解」という問題に着目する。Nadelhoffer et al. (2023) など一部の研究によれば、実験哲学に参加する一般人の多くは決定論的宇宙の理解に失敗しているという。このことは、哲学的訓練が哲学的問題の理解を可能にすることで哲学的直観の産出に寄与するという本稿の主張を経験的に裏付けるものである。本稿はこのモデルが哲学研究全般に当てはまると主張するわけではないが、本モデルはいくつかの哲学的問題において成立しうると考えられる。

近年、心理学研究の手法を応用して一般人の直観を経験的に調査する、いわゆる実験哲学的研究の進展に伴い、人々の哲学的直観は哲学的真理とは無関連の要因に影響されることが明らかとなっている。具体的には、フレーミング効果や提示順序効果などが代表的である。こうした事実を踏まえ、Weinberg et al. (2001) やSimnott-Armstrong (2008) など一部の論者は、哲学的直観の信頼性に疑問を投げかけ、直観の使用を批判してきた。

Expertise Defenseとは、こうした経験的批判に対する応答の一つであり、Williamson (2007) やHales (2006)、Ludwig (2007) らによって提唱されている。私たちは、たとえ物理学の素人が行う物理学の実験が信頼性を欠いているからいって、物理学それ自体が信頼できないと考えたりはしないし、法律の素人の判断が信頼できないからといって、プロの法学者の判断までもが信頼できないと考えたりはしない。つまり、多くの領域においては、素人の判断が信頼できないからといって、そのこと自体は専門家の判断が信頼できないと考える理由にはならない。これと同様のことが哲学的直観にも当てはまるとするのが、Expertise Defenseの基本的な内容である。つまり、Expertise Defenseにおいては、「専門家の判断に信頼が置かれている領域」と「哲学」とのアナロジーに基づき、たとえ素人の直観が信頼不可能であったとしても、プロの哲学者の直観はなおも信頼可能であることが主張される。

しかしながら、Expertise Defenseに対しては大きくわけて二つの批判がある。第一の種類の批判は、哲学と他の領域との間のアナロジーは成立しない、というものである。Weinberg et al. (2010) やRyberg (2013) によれば、専門家の判断に信頼が置かれている他の領域とは異なり、哲学的経験がいかなる意味で直観の産出に寄与しているのかは不明瞭である。第二に、Mizrahi (2018) が指摘するように、哲学者の直観もまた、哲学的真理と無関係な要因に影響されるという経験的な証拠がある。

こうした批判に対し本論文では、第一の批判へ理論的・経験的に十分な応答を提示することを通じて、特定の仕方で解釈されたExpertise Defenseの妥当性を主張する。筆者はInarimori (forthcoming) において、第一の批判へ応答することでExpertise Defense一般が擁護できると主張した。なぜなら、専門家の判断が真理と無関係の要因に影響されることとそれ自体（第二の批判）は、専門家の判断の信頼性にとって致命的ではないと考えられるからだ。しかし3節で論じる通り、第一の批判への応答によって充足されるContribution要件はExpertise Defense一般に支持を与えるわけではないと考えられる。そこで本論文では、Contribution要件を充足する≒他領域とのアナロジーを示すことでExpertise Defenseの一解釈が擁護できることを明らかにする。そのうえで、哲学的訓練がいかにして直観の産出に貢献するかを明らかにすることで、哲学における専門家と他領域の専門家との間にアナロジーが成り立つことを示す。

では、哲学的トレーニングはいかにして哲学的直観の産出に貢献するのだろうか？この問題に対し本稿は、哲学的経験は哲学的事例の理解を可能にし、事例直観を可能にするという仕方で哲学的直観の産出に貢献しているというモデルを提案する。同時に、自由意志の実験哲

main.indd 84-85 2024/02/07 14:35:29

学における近年の研究に注目し、本モデルが少なくとも自由意志の哲学においては経験的に支持されていることを明らかにする。自由意志の実験哲学では、決定論的行為に対する人々の責任帰属直観が調べられてきたが、その中で、実験参加者の多くが決定論的世界の理解に失敗してしまうことが示されている（c.f. Nadelhoffer et al. 2023）。つまり、哲学者とは異なり、一般人の多くは決定論を正しく理解することができない。それゆえ、決定論的行為に対する直観を抱くことができない。この事実は、哲学的経験が直観の産出に寄与しているという本稿の主張を経験的に裏付けるものである。もちろん、このことをもって本モデルがあらゆる哲学的議論全般に当てはまり、Expertise Defense が基づくアナロジーが哲学一般で成り立つことが示されるわけではないが、このモデルはいくつかの哲学的問題に拡張可能であると予測される。

本稿は以下の通り議論を進める。まず、Expertise Defense の内容とそれに対して向けられてきた批判について概観する（2節）。そのうえで、Expertise Defense を再解釈することによって、これら二種類の批判のうち、アナロジーの不備という問題に応答することで Expertise Defense を擁護できること、およびこの問題に応答するうえで満たすべき要件 (Contribution) を明らかにする（3節）。以上の整理を踏まえ、自由意志の実験哲学における最近の研究を参照しつつ、少なくとも自由意志の問題に関しては哲学と他領域の間に重要なアナロジーが成り立つことを示す（4節）。また、本論に対して想定されるいくつかの問題点についても検討する（5節）。

2　Expertise Defense とその問題点

現代哲学において、直観は哲学的命題・理論を正当化する証拠としての役割を果たしてきたと考えられる。なお、「直観」という語の意味をめぐっては、認識論の文脈で様々な議論がなされてきた。たとえば Bealer (1998) は、直観は知覚とは異なる「知的なみえ」(intellectual seemings) であると主張している。対して Bengson (2015) のように、直観をまさしく知覚と同じようなものとして説明する論者もいる。本稿はこうした議論における特定の立場にコミットするわけではないが、どの立場をとるにしても、直観は意識的な推論および信念（判断）から区別されることが多い。実際、この区別は実験哲学においてもある程度受け入れられていると考えられる。たとえば Sinnott-Armstrong (2008, 209) は、「直観とは、大まかに言えば、意識的な推論によらない特定の主張に対して感じられる引き付け、あるいはそれを信じようとする傾向のことである」と述べ、直観と信念（判断）とを区別している。しかし、本稿で取り上げる自由意志の実験哲学では、論文中で「直観」と「判断」がおよそ同じ意味で用いられていることも多い。本稿では以上の点を総合的に勘案し、「ある命題の真偽に関する意識的推論によらない判断」[2]を意味する語として「直観」を用いる。

しかし二〇〇〇年代以降、哲学的直観に関する実験哲学的研究が進展する中で、私たちの直観は哲学的真理と無関係の要因に影響されることが明らかとなってきた。そうした事実を踏まえ、一部の論者は直観が証拠としての役割を果たすことに否定的な見解を示してきた。たとえば Weinberg et al. (2001) は、認識論的直観が文化差に影響されることを根拠に、直観に基づいて特定の認識論的理論を正当化することの困難を指摘している。また、Sinnott-Armstrong (2008) は、私たちの道徳直観が提示順序効果やフレーミング効果によって左右されることを示す数多くの研究を根拠に、道徳直観は信頼できない、つまり、道徳的真理をトラックしていないと主張している。

本稿が取り上げる Expertise Defense は、こうした直観批判に対する応答の一種である。多くの Expertise Defense は、専門家の判断が信頼されている他領域と哲学とのアナロジーに基づく論証をとっている。たとえば、代表的な論者の1人である Williamson は、哲学と法学のアナロジーを提示している (2007, 191) ほか、哲学と物理学の間にもアナロジーが成り立つと論じている。

> 結局のところ私たちは、物理学の訓練を受けていない学部生は実験が下手だという証拠に基づいて物理学者が（中略）現在のプロジェクトを中断することを望んだりはしない。物理学の実験室実験の水準は、哲学の思考実験の水準よりも高いことは間違いない。しかし、どちらの場合も、そうすることが当該領域を悪化させるどころか、より良くするだろうという重大な証拠なしに、確立された方法論を変えることは愚かであるということに変わりはない。（Williamson 2011, 217, 筆者訳）

たとえ物理学の素人が行う実験や、素人が下す判断が信頼できないからといって、私たちは物理学のプロが行う実験やそれに基づく判断までもが信頼できないと考えたりはしない。素人の判断の信頼不可能性は、プロの判断が信頼できないと考えるべき十分な理由を与えないのである。Williamson によれば、同様のことが哲学的直観にも当てはまるとされる。

Expertise Defense のこうした主張は、以下の形に整理することができる。

前提1　哲学者の哲学的直観と他領域の専門家の判断の間には重要なアナロジーが成り立つ。

前提2　哲学以外の領域では、一般人の判断が信頼できないことは、専門家の判断が信頼できないと考える十分な理由にはならない。

結論　したがって、一般人の直観が信頼できないことは、哲学者の直観もまた信頼できないと考える十分な理由にはならない。

この論証が正当なものであれば、たとえ一般人の直観が信頼できないものであったとしても、プロの哲学者の直観は信頼に値するということになる。しかしながら、次節で論じるように、こうした Expertise Defense の論証には大きく分けて二つの問題点が存在する。なお、Ludwig (2007) や Hales(2006) が実験哲学者の批判に対して

main.indd 86-87 2024/02/07 14:35:29

明確に（哲学者の）哲学的直観の信頼性を主張しているのとは対照的に、Williamson の記述から直接的に読み取れるのは、哲学者の直観が信頼できるということではなく、むしろ哲学者の思考実験や、思考実験によって導かれる判断は素人のそれと比較してより信頼に値する、ということである。実際 Williamson (2007; 2011) 自身は、哲学的議論で一般に「直観」とラベル付けされているものは私たちがあらゆる文脈で用いている一般的な認知能力に基づく判断であり、彼自身は「直観」という語を哲学的議論で用いることそれ自体に否定的な立場をとっている。しかしながら、こうした直観に関する Wiliamson の立場がどこまで妥当であるかは議論の余地がある。本論は直観と判断一般を同一視する Williamson の立場については判断を保留したうえで、哲学的思考実験で産出される、ある命題の真偽に関する意識的推論によらない判断としての直観（事例直観）に焦点を当てる。

また、本論文では哲学的直観とのアナロジーが成立する具体的領域を特定することはしないが、直観に関する種々の立場を踏まえ、他分野の専門家の（意識的推論によらない）直観的判断だけでなく、あくまで信頼できる専門家の判断一般と哲学者の哲学的直観の間にアナロジーが存在するかどうかに注目する。たとえばプロのチェスプレイヤーやプロの物理学者は、意識的な推論を経ずとも、ある手が悪手であるか否か、ある物理現象が可能であるか否かといった事柄について直観的判断を下すことができるかもしれない。こうした専門家の直観は間違いなく素人の直観より信頼性が高く、より高い確率で真理をトラックしていると考えられる。また、物理学者が個々の実験で得る観察データそれ自体は「直観」とは異なるが、哲学理論に対するデータとしての直観と類比的にとらえることができる。これに対し、プロの法律家が個別事例の適法性について熟慮の末に導き出す判断は素人のそれより信頼できるにせよ、明らかに直観的なものではない。もっとも、Williamson のように哲学的直観を判断に置き換えて考えるなら、こうした判断とも直接的なアナロジーが成立するかもしれないが。重要なのは、こうした専門家の判断は、まさに専門的知識や経験がその産出に寄与しているがゆえに、素人の判断よりも高い確率で真理をトラックしていると考えられるということだ。次節ではこの観点から、哲学的直観と他分野における専門家の判断との間にアナロジーが成立するかどうかを検討していく。

3　批判の検討とその教訓

Expertise Defense に対する反論は、上記の論証における前提1に対するものと、結論それ自体に対するものに分けることができる。たとえば、Ryberg (2013) は、哲学と他領域のアナロジーは成り立たないとして、前提1への批判に相当する議論を展開している。彼は道徳直観に着目し、哲学的直観は他領域と異なり、経験がその産出に因果的に寄与しているようには思われないと指摘する。専門家の判断に信頼が置かれるチェスや数学の場合、素人はそれらの問題については曖昧な直観すらもつことができない。一方、哲学の訓練を受けていない素人であっても、道徳的な問題については明瞭な直観をもつことができき、哲学者の直観は無関連要因に影響されないと主張している」と解釈するならば、上記の批判に応答することは難しい。実際、Expertise Defense は哲学的専門性がいかにして無関連要因の影響を無効化するのか、という点について十分な理論的説明を提供しているとは言い難い。Williamson (2007, 191) は哲学的専門性の例として「細部への注意深さ」などを挙げているが、こうしたスキルが無関連要因の影響から哲学者を自由にする理由が十分明示されているとは言えない。加えて、Mizrahi (2015) の指摘を踏まえれば、こうした主張が経験的に疑わしいことは明らかだ。

他方、「Expertise Defense はアナロジーに基づき、哲学者の直観は無関連要因の影響を踏まえてもなお、素人の直観より信頼できると主張している」と解釈するならば、少なくとも第二の批判は Expertise Defense にとって致命的ではない。たとえば、仮にプロの法律家の判断が一般人と同程度に提示順序効果やフレーミング効果などの無関連要因に影響されるとしても、それをもってプロの判断が法律の素人と同程度の信頼性をもたないことにはならないはずだ。なぜなら、プロの判断は法律に関する知識と経験に基づいたものであり、それゆえ素人の判断よりもはるかに高い確率で法学上の真理をトラックしていると考えられるからである。もちろん、法律家の判断が無関連要因それ自体に大きく左右されている場合、話は別である。たとえば Danziger et al. (2010) の研究では、判事が最後に食事を採ってから時間が経過するにつれて、仮釈放許可率が65％から0％近くに低下するというデータが示されている。当然のことながら、判事の空腹度合

る。たとえば、トロッコ問題を提示されたとき抱かれる直観の明瞭さが、素人と哲学者の間で大きく異なるとは考え難い。したがって、過去に何度も思考実験を行ったことがあるといった哲学的経験が哲学的直観の産出に寄与しているようには思われない。このタイプの批判は、哲学的専門性が直観の産出に寄与するとする Expertise Defense の理論的不備を指摘するものとして理解できる。

このようにアナロジーの不備を指摘する声がある一方で、Mizrahi (2015) は先ほどの論証における結論それ自体への批判に相当する問題点を指摘している。Expertise Defense は素人の直観に比べて哲学者の直観の信頼性が高いことを主張するものであるが、Mizrahi によれば、いくつかの経験的研究は、哲学者が素人同様に哲学的真理と無関連の要因に影響されることを示している。たとえば Schwizgebel & Cushman (2012) の研究は、二重効果・道徳的運などに関する提示順序効果は、哲学専攻の大学院生にも見受けられることを明らかにした。他にも、Tobia, Buckwalter, & Stich (2013) の研究では、行為を記述する人称（二人称・一人称）によるフレーミング効果は哲学者にも影響することが示されている。こうした経験的証拠に照らすと、哲学者の直観は素人のそれより信頼性が高いという Expertise Defense の帰結それ自体が疑わしい。このタイプの批判は、哲学的専門性が直観の信頼性を向上させるという Expertise Defense の経験的な非 - 妥当性を指摘するものとして理解できる。

これら二種類の批判の強力さは、Expertise Defense をどのように解釈するかに依存する。もし「Expertise Defense はアナロジーに基づ

main.indd　88-89　2024/02/07　14:35:29

いは法学上の真理にとって無関係な要因（無関連要因）に他ならない。[3]このように、プロの判断が無関連要因の劇的な影響を受けるのであれば、法律に関する知識と経験が判断の産出に寄与しているか否かにかかわらず、プロの判断は法学上の真理を十分トラックしていないことになるだろう。つまるところ、無関連要因の影響が専門家による判断の信頼性を素人のそれと同程度に低下させるかどうかは、無関連要因の影響の程度および判断に対する専門性の寄与に依存すると考えられる。

哲学的直観の場合、無関連要因の影響がそれほど重大なものであるかどうかは定かでない。Demaree-Cotton (2016) はフレーミング効果に関する複数研究のメタ分析を通じ、フレーミング効果の多くはフレーム間で大半の人々が異なる直観を示すほどの劇的な効果をもつわけではなく、フレーミング効果が道徳直観の信頼性を大きく損なうという見解は疑わしいと論じている。彼女の分析によれば、各研究を通じて平均80％近くの判断はフレーム間で一貫していたと考えられる。同じように Knobe (2021) も、哲学的直観の不安定性に関する研究の包括的なメタ分析を通じ、哲学的直観に対する文化差や性差といった集団差、嫌悪感情や提示順序といった状況要因の影響は総じて限定的であるという見解を支持している。もちろん、無関連要因の影響を受ける以上、哲学者の直観は素人の直観と同程度に信頼できないという批判は可能である。しかし、このように無関連要因の影響が限定的なものにとどまるならば、哲学者の直観と他領域の専門家による判断との間にアナロジーが成り立つ限りにおいて、つまり、哲学的経験・訓練が直観の産出に寄与している限りにおいて、哲学者の直観は素人の直観より信頼できると見なせるだろう。

したがって、Expertise Defense を後者の意味で解釈するならば、この論証を擁護する上で重要なのは、Expertise Defense に対する第一の批判に応答することを通じて、哲学と他領域とのアナロジーを擁護することである。つまり、哲学的経験が哲学的直観の産出に寄与するという点について理論的な説明を提供することが求められる。同時にその説明は、経験的な事実と整合的なものである必要がある。

言い換えれば、以下の要件を理論的・経験的に充足することによって Expertise Defense を擁護することができる。[4]

> Contribution: 哲学における経験がいかにして哲学的直観の産出に寄与するのかが説明されなくてはならない。

なお、Contribution の充足は、あくまで Ryberg (2013) が指摘する類のディスアナロジーが存在しないことを示すにすぎない。Contribution の充足は他分野における専門家の判断と哲学的直観とのアナロジーにとって重要な要素の一つであり、本要件の充足は Expertise Defense への主要な批判の一つを掘り崩すことによって Expertise Defense に支持を与えるものである。よって本論文の議論は、経験や訓練が専門家の直観 / 判断の産出に寄与しているという点以外の重要な点で致命的なディスアナロジーが存在するという可能性を排除するものではない。想定されるディスアナロジーのうち特に重要な

フィードバックと基準の問題については、5節で詳しく取り上げる。同時に、ある分野における Contribution 要件の充足それ自体は、当該分野における専門家の判断の信頼性を決定づけるものではない。たとえば、未来の出来事についての占いと科学との間には、専門性の寄与という点でアナロジーが成り立っているといえるかもしれない。個々の占いが信頼できるものであるかは定かでないが、たとえアナロジーが成立していたとしても、ある占いが未来の予測に高確率で失敗するとなれば、その占いは信頼できないということになるだろう。

以後本論文では、哲学的経験が哲学的直観の産出に寄与する理論的枠組みを提案することによって、いかにして Contribution が充足されるかを明らかにする。そのうえで、自由意志の実験哲学における近年の研究成果、および我々の実験結果を参照しつつ、本稿の提案は少なくとも自由意志の実験哲学においては経験的に支持されていることを論じる。

4　哲学における経験はどのように直観の産出に寄与するのか

では、哲学における経験はどのように直観の産出に寄与するのだろうか。本論文の提案は、哲学的訓練は哲学的問題の理解に必要な哲学的専門性を養い、特定の問題に対する直観を可能にするという仕方で哲学的直観の産出に寄与している、というものだ。思考実験をはじめ、ある哲学的問題について直観をもつためには、その問題を理解していることが必要である。たとえば、決定論的行為について直観をもつためには、大前提として「決定論」がどういった状況であるのかを正確に理解していなくてはならない。そして、決定論のような哲学的問題を理解するためには、哲学的訓練が必要である。

実際、自由意志の実験哲学における近年の研究は、実験参加者の多くが決定論の正確な理解に失敗している可能性を示している。分析系の自由意志論では、伝統的に決定論と自由意志の両立可能性が問題となってきた。両立論と非両立論をめぐるこの論争では、私たちの直観は両立論的か非両立論的かが大きな争点となっている。事実、両立論的立場を支持する Frankfurt (1969) が考案した「フランクファート事例」に代表されるように、数多くの哲学者が思考実験を通じて各理論が私たちの直観と整合的であることを示そうと試みてきた。そうした背景もあり、自由意志の実験哲学では、決定論に関する人々の直観を調べる試みが数多くなされている。こうした実験では多くの場合、実験参加者に決定論的世界を描写したテキストを与え、そうした世界で自由意志・道徳的責任の帰属が可能か否かを尋ねるという手法が用いられる。一例として、以下は最も有名な研究の一つである Nichols & Knobe (2007) の実験で用いられたテキストの一部である。

> ある宇宙（宇宙A）を想像してみてください。この宇宙で起こることはすべて、その前に起こったことのみに起因しています。これは宇宙の始まりから言えることで、宇宙の始まりに起こったことが次に起こったことを引き起こし、それが現在に至るまで続い

main.indd　90-91　　2024/02/07　14:35:30

ているのです。たとえば、ある日ジョンは昼食にフライドポテトを食べることに決めました。この決断も、他のすべてのものと同様に、その前に起こったことのみに起因していたことになります。だから、もしこの宇宙のすべてが、ジョンが決断するまで全く同じであったとしたら、ジョンがフライドポテトを食べると決断することは、起こらざるを得ないことであったということです。

しかし、Nadelhoffer et al. (2023) によれば、こうした実験手法には大きな欠陥があるという。

シナリオ提示型の実験では、多くの実験参加者が二つの仕方で決定論を誤解してしまうことが分かっている。一つは「バイパス」と「決定論」の混同である。Nahmias & Murray (2010; 2014) は、決定論的世界について非両立論的反応を示す参加者の多くがバイパス判断を下していることを明らかにした。バイパス判断とは、決定論的世界では、行為者の欲求・信念・選択が行為に対して因果的作用をもたない、つまり、行為者の心的状態がバイパスされるという判断である。しかし、決定論はバイパスを含意しない。そうではなく、決定論的世界では行為者の特定の心的状態が決定論的に生じ、その心的状態がある特定の行為を因果的かつ必然的に引き起こすのである。ゆえに、決定論的世界で心的状態が因果的効力をもたないと判断することは決定論の誤解にあたる。Nahmias & Murray は、多くの人々がこうした誤解を犯していることを発見した。決定論に関するもう一つの誤解は、非決定論的前提の侵入 (intrusion) である。Nadelhoffer et al. (2020) が行った実験では、実験参加者の多くは決定論状況における別 - 可能性の排除を理解できていないという可能性が示されている。決定論的世界ではあらゆる出来事が因果的かつ必然的に引き起こされるため、実際に引き起こされた以外の出来事が生じる可能性、つまり別 - 可能性は存在しない、しかし彼らの実験では、決定論と自由意志について両立論的回答をする人々の多くがこの点を理解できていないことが明らかとなった。

驚くべきことに、Nadelhoffer et al. (2023) が行った研究では、実験参加者の殆どが決定論を誤解している可能性が示されている。上で示した Nichols & Knobe (2007) のシナリオを用いた実験では、実験参加者でバイパスに関する文を与えられた人のうち実に 98％が一つ以上の文に同意し、非決定論的前提に関する文を与えられた人のうち実に 67％が一つ以上の文に同意していた。つまり、殆どの参加者は決定論を誤解していたのである。この結果を踏まえ Nadelhoffer らは、自由意志の実験哲学における方法論を根本的に見直す必要性を指摘している。

もっとも、Nadelhoffer らの研究で明らかとなった「決定論の誤解」は、単にシナリオの不備に起因するものであるという可能性もある。彼らの研究では Nichols & Knobe (2007) のシナリオと Nahmias et al. (2005; 2006) のシナリオを用いて実験がなされていたが、単にこれらの描写が決定論の説明として問題含みであったがゆえに人々が理解チェックを通過できなかったと解釈する余地も残されている。我々

のグループでは、この問題について日本人を対象にさらなる実験を行った (Inarimori et al. in preparation)。我々は決定論の理解度向上を目的として決定論の新たな描写、およびそれに基づく映像を作成し、Nichols & Knobe (2007) を含む三つの群で一二〇〇人に対してバイパス文と侵入文を各4文ずつ与え、人々の理解度を7点スケールで調査した。アテンションチェックを通過した九九九人の回答を分析したところ、それぞれの文に対する同意の平均が4を下回った参加者は各群でおよそ20％程度に留まり、バイパス文と侵入文すべてに否定的回答をした参加者は全体で1％程度であった。我々の実験結果もまた、多くの一般人は決定論を正確に理解できないという見解を強く支持している。もちろん、私たちの用いたシナリオが問題含みであったがゆえに人々が誤った回答を与えたという可能性も排除できないが、複数のシナリオにおいて理解エラーの問題が確認されている以上、人々が決定論を正しく理解できないと考えるべき十分な根拠があるといってよいだろう。

では、なぜ一般人は決定論を正確に理解することができないのだろうか。それはまさに、決定論を理解するのに必要とされる哲学的専門性の欠如によって説明することができるだろう。哲学者は学部生の頃から決定論に関連するテキストに何度も触れ、その中で決定論が何を含意し、何を含意しないのかについて理解を深めていく。そのようにして養われた哲学的専門性があるからこそ、哲学者は決定論的な世界について直観をもつことができる。一方、そうした経験をもたない一般人は決定論という概念を正確に理解することができないため、そもそも決定論について直観をもつことができないのである。

自由意志の実験哲学における理解エラーの問題をこのように解釈するならば、本章冒頭で提示したモデルは経験的に支持されていると言うことができる。私の提案は、哲学的訓練は哲学的問題の理解に必要な哲学的専門性を養い、特定の問題に対する直観を可能にするという仕方で哲学的直観の産出に寄与している、というものであった。本章では実験哲学の成果を参照しつつ、この理論的枠組みが少なくとも自由意志の哲学においては経験的妥当性を有することを明らかにした。したがって、少なくとも自由意志の哲学においては、前章で示した Contribution 要件が理論的・経験的に充足されることが示されたことになる。言い換えれば、自由意志論においては哲学と他領域との間にアナロジーの成立することが示された。

ここでいくつかの補足を述べておこう。第一に本提案は、哲学者は概念をよりよく理解しているため無関連要因の影響から自由であり、ゆえに哲学者の直観は素人のそれより信頼できる、というものではない。あくまで本論文の主張は、哲学的専門性は正確な概念理解を通じて哲学的直観に寄与しているため Expertise Defense に対する第一の批判に応答可能である、というものに留まる。3章で論じた通り、この応答によって Expertise Defense の一解釈を擁護することができる。

第二に、本論文は哲学的専門性に関するこのモデルが哲学的議論一般に等しく当てはまると主張するものではない。この議論が自由意志の哲学以外にどこまで当てはまるかは完全に経験的な問題である。実際、トロッコ問題のような非常に簡単な思考実験の場合、ちょうど物

main.indd 92-93 2024/02/07 14:35:30

理学の素人が斜面を転がる軽い玉と重い玉の速さが同じであると認識することができるのと同様に、一般の人でも明瞭な哲学的直観を抱くことができるように思われる。こうした単純な事例では、哲学的直観の産出に哲学的専門性は必要とされないか、あるいは必要とされる哲学的専門性は極めてミニマムだと考えられる。したがって、あらゆる哲学的直観の産出に哲学的訓練が必要であるか否かは定かでない。ゆえに、本論文の提案は自由意志の哲学のみに当てはまる特殊な現象を捉えたものに過ぎない、という可能性は排除できない。しかし筆者は、哲学的経験は哲学的問題の理解を可能にすることで哲学的直観に寄与するという本モデルはいくつかの哲学的問題に拡張可能であると考えている。たとえば、非同一性問題など、人格の同一性に関わる問題について直観をもつためには、ある程度の哲学的専門性が必要であるように思われる。非同一性問題に関する直観をもつためには、環境に優しい政策Aを採った場合と環境に悪い政策Bを採った場合とで未来に生まれる人の同一性が変化するということを理解する必要がある。そしてこのことを理解するためには、人格の数的同一性という概念を把握していなくてはならない。実際、実験生命倫理学における最近の研究では、一定割合の人々が人格の同一性をめぐる哲学的問題の理解に失敗してしまうことが示されている（Żuradzki & Dranseika, 2022）。このように一部の複雑な哲学的思考実験は、与えられた事例の設定を理解することそれ自体に相応の哲学的専門性が必要とされる可能性がある。

第三に、本論文の主張は、哲学者であれば誰もが決定論を正しく理解しているというものではない。経験的データが示しているのは、一般の人々は決定論を正しく理解できないということであり、哲学者であれば誰もが決定論の誤解から自由であるということを示しているわけではない。実際、哲学者を対象として決定論の理解に関するテストを行えば、多くの哲学者は決定論を正しく理解していないことが明らかになるかもしれない。しかし、たとえ哲学者の多くが決定論を誤解しているにしても、自由意志を専門とする哲学者、もっと言えば自由意志に関する実験哲学的研究を設計している哲学者に的を絞れば、彼らは決定論と運命論の区別といった事柄を正しく理解しているはずだ。このことはまさに、自由意志の問題に関する彼らの哲学的経験によって説明できる。ゆえに、哲学者の決定論理解に関する経験的データの存在しないことは、本議論を掘り崩すものではない。

第四に、直観の産出に際して決定論が何を含意するかについての理解が必要となるのであれば、そうしたプロセスを経て産出される判断は、まさに意識的推論に基づく判断であり、意識的推論によらない判断としての直観にはあたらないのではないか、という懸念があるかもしれない。しかし本稿の主張はあくまで、決定論的状況に関する直観が産出されるための前提条件として決定論の正確な理解が必要とされる、というものであって、決定論を正確に理解しているひとが「この宇宙において行為者は道徳的責任を負いうるか」という命題について直観的判断を下すとき、その判断がまさに意識的推論によって導かれる、というものとは異なる。

最後に、本論文と類似した立場との相違について簡単に触れておきたい。Schindler & Saint-Germier (2023) が哲学者と一般人を対象に行った研究では、哲学者は概して一般人より思考実験のシナリオ理解に秀でていることが示されている。彼らはその結果をもって、哲学者の直観は一般人の直観と同様に無関連要因の影響を受けるにせよ、なおも哲学者の直観はより信用できる (trustworthy) と考える理由があると結論付けている。しかし彼らの議論は一般人が事例直観を有することそれ自体は認めており、そのうえで哲学者の直観が優先されるべき理由があることを主張するものである。一方本論文は Schindler & Saint-Germier (2023) の議論よりもさらに踏み込み、事例の理解度に着目して哲学と他領域のアナロジーを擁護しているという点で彼らの議論とは一線を画す。また Expertise Defense の論者の一人である Ludwig (2007) は、一般人は思考実験を行うのに必要な概念的能力を欠いているため、実験哲学において得られた一般人の回答データを「直観」と見なすことそれ自体が誤りであるという立場をとっている。Ludwig の立場は。一般人は事例直観をもつために必要な事例の理解を欠いているという本論文の主張と共通する部分がある。しかし彼はあくまで、そうした能力を兼ね備える哲学者は無関連要因の影響を受けないと主張している点で、本論文とは立場を異にする。Ludwig に近い立場として Bengson (2013) も同様、私たちはある問題について直観を欠く場合でも選択肢からとりあえずの回答を与えることができる以上、一般人の回答それ自体が彼らの直観を反映していると考えることは性急であると主張している。本論文の主張は、一般人の回答は決定論についての直観を反映していないという含意をもつ。この点で Bengson の立場と筆者の立場は共通している部分もあるが、筆者は Bengson と異なり、提示順序効果やフレーミング効果によって生じる回答の多様性がこの可能性によって説明できるとは考えていない。

5　いくつかの問題の検討

結論に入る前に、本論文の提案に対して想定されるいくつかの問題について検討しておく。

5・1　フィードバックと基準の問題

単に哲学的経験が哲学的直観に寄与するというだけでは、哲学と他の領域とのアナロジーを示すのには不十分であると指摘する人もいるだろう。実際 Ryberg (2013, 6) や Weinberg et a.(2010, 241) は、この点に着目して哲学と他領域のディスアナロジーを指摘している。彼らの主張を要約すると、経験が判断を向上させるのは、判断の真偽を伝える十分な量のフィードバックがある場合に限られる。チェスや数学など、一般に専門家の判断に信頼が置かれている領域では、真偽を伴うフィードバックが判断の質を向上させていると考えられる。一方、哲学の場合、哲学的直観を評価するための直観から独立した評価指標はないように思われるし、それゆえ判断の真偽に関するフィードバックも欠如しているように思われる。

しかし、哲学的直観には直観と独立した評価指標およびフィードバックが存在する。我々はある哲学的問題に関連する概念的真理とい

main.indd 94-95 2024/02/07 14:35:30

う基準に照らして直観を評価することができる。たとえば決定論に関する直観の場合、私たちは決定論が概念的に何を必然的に伴い、何を排除するのかという概念的真理に照らして、ある人の決定論の理解度を直観と独立に評価できる。これは実際に実験哲学者がやっていることに他ならない。そうした基準に照らして、ある人の直観が決定論的世界の誤解に基づいていることが明らかになれば、その人の回答は決定論に関する真理をトラックしていないものとして退けられることになる。また、哲学者は哲学を学ぶ過程で論文指導を受け、他の哲学者と議論をする中で自身の哲学的問題の理解に関するフィードバックを受け、その質を向上させていく。哲学者であれば、多くのひとがこうした経験を有しているのではないだろうか。

もっとも、哲学的問題、たとえば自由意志に関する概念的真理とは、結局のところ直観によって明らかにされる他ないのだから、直観から完全に独立した評価指標ではありえないという反論もありうるだろう。たとえば、決定論それ自体は心的状態の因果的効力を排除しない、といった決定論にまつわる概念的真理は、究極的には心的状態の因果作用に関する直観的判断に依拠して導かれるものであるかもしれない。しかしながら、Rini (2014, 13) も指摘しているように、ある能力に基づく判断を評価するに際して、その能力から完全に独立した評価基準を求めるのは、過剰な要求であるように思われる。たとえば視覚に基づく判断の真偽の評価は、結局のところ視覚能力によって形成された他の判断に照らして判断するほかない。自然科学に関しても、ある観察結果の真偽は、結局のところ他の観察結果や、それに基づく理論に照らして評価するほかないだろう。こうした評価において視覚や観察から完全に独立な評価基準が必要であるとすれば、私たちはラディカルな懐疑論に陥らざるを得なくなる。また同様の理由から、ある事例直観とは異なる別の直観的判断、および直観に基づいて正当化された哲学的原理・理論といったものも、他分野における判断の評価基準と類比的とみなすことができる。反省的均衡のプロセスで用いられるこうした評価基準は直観から独立の評価基準ではないが、ある観察結果とは異なる別の観察結果や、観察結果に基づいて正当化された科学理論などと同じような仕方で個別の直観にフィードバックを与えるものである。

5・2　哲学的専門性と信頼性

哲学的専門性が哲学的直観の産出に寄与しているとはいえ、実際のところ、哲学的経験は哲学的直観の信頼性を向上させていると言えるのだろうか。本稿の目的はあくまでアナロジーの存在を示すことによってExpertise Defenseを擁護することにあるから、この問題は厳密には本稿の範囲を超え出たものである。だが、本稿の提案に基づいてこの問題に関するいくつかの可能な回答を導くことはできる。

第一に、自由意志論のように哲学的専門性がなければ直観をもつことができない領域においては、そもそも素人は直観をもつことができない。ゆえに、決定論に関する素人の直観は、まさに直観を有さないがゆえに、僅かな信頼性も有さないことになる。一方哲学者の直観は、まさに直観を有しているがゆえに、ゼロよりも大きい確率で決定

論に関する哲学的真理をトラックしていることになる。ゆえに、哲学者の直観は非常にトリヴィアルだが重要な意味で素人の直観より信頼性が高いと言えるだろう。

第二に、Bealer (1996) の "Modal Reliabilism" など一部の理論によれば、概念の正確な理解はそれ自体がより多くの真理の直観を可能にするという。Modal Reliabilism によれば、ある人がある概念に関して直観できるアプリオリな真理の数は、その概念の理解度と認識能力に依存する。概念を正確に理解し、高い認識能力をもっているほど、その概念についてより多くの真理を直観することができるというわけだ。本論文で提案したように、哲学的専門性が哲学的概念の理解を可能にしているのであれば、哲学者はまさに概念の正確な理解を有するがゆえに、素人よりもより多くのアプリオリな真理を直観することができ、その意味において哲学者の直観はより高い確率で哲学的真理をトラックしていると主張することができるかもしれない。

5・3　真理の一致に関する問題

科学諸分野の場合、専門家と非専門家の間で概ね理解が一致しうるため、専門家の考えが真理をトラックしているという点について専門家と非専門家が容易に合意できる一方、自由意志と決定論など、哲学的問題については同様のことは成り立たないのではないか、という懸念をもつ人もいるだろう。しかし第一に、科学諸分野であれ、必ずしもすべての領域で専門家と非専門家の間で理解が一致しているわけではない。たとえば高度な数学の問題に関しては、非専門家はそもそも何が問題になっているかを理解することすら難しいため、非専門家が専門家と判断を共有することは往々にして不可能である。また医学的判断など、患者が専門家の判断に従うため、結果として専門家と非専門家の判断が一致しているという場合でも、非専門家＝患者が医師と同じ水準で問題を理解し、そのうえで治療方針などの医学的判断を共有しているということは稀だろう。第二に、そもそも専門家の間でさえ、判断が一致していないということは珍しい話ではない。ほんの一例として、宇宙の終焉など一部の物理学的問題については様々な理論が提唱されているものの、物理学者の間で統一された見解があるわけではない。

また、物理学では子供であっても体験物理学教室のようなイベントを通じて専門家と同じように実験を行うことができるのに対し、哲学ではそのようなことは成り立たないように思われる、という点を問題視するひともいるかもしれない。しかし、トロッコ問題のように必要とされる専門性がミニマムな思考実験であれば、小学生くらいの子供でも専門家と同じように直観を産出できると考えられる。もっとも、そうした架空の事例に関してうまく直観を産出できないという可能性もあるが、物理学の体験教室であっても、小さい子供が正しい手順で実験を行うことに困難が伴うということは珍しい話ではないだろう。関連して、物理学の実験などと異なり、思考実験では素人と専門家で実験結果が違ったとして、前者が誤りで後者が正しいと言える根拠はないのではないか、と疑問に思う人もいるかもしれない。物理学の実験結果が素人と専門家で異なる場合、互いの実験手順に誤りがないか

main.indd 96-97 2024/02/07 14:35:30

を点検することになるだろう。多くの場合、素人の実験手順に問題があることによって彼らの実験結果が退けられることになるかもしれないが、仮に素人の手順に何ら誤りがないにもかかわらず、なおも両者の実験結果に相違があるとしてみよう。この場合、どちらの結果が優先されるべきかは、他の実験結果や既存の理論に照らして改めて評価する必要があると考えられる。同様に、思考実験を行うのに十分な程度事例をよく理解した素人と哲学者の間で直観の相違があるという場合、他の直観や既存の哲学理論に照らしてどちらの直観が優先されるべきか評価する必要があるだろう。

5・4　実験哲学への示唆

本論文の議論は、一般の人々はいくつかの場合において哲学的直観をもつことができないという重要な帰結をもつ。このことは実験哲学に対してどのような問題を提起するだろうか？筆者の提案から導かれるもっともナイーブな回答は、自由意志の哲学などの分野では、直観を調べるタイプの実験哲学は無意味である、というものだろう。人々がそもそも自由意志の問題について直観をもつことができないならば、それを調べようとする試みは意味をなさないように思われる。また、この立場を推し進めるなら、実験哲学者は哲学者や哲学科の学生など、ある程度の哲学的専門性を有する人々を対象として実験を行うべきである、といった考えもありうるだろう。もっとも、そうした実践によって実験哲学的プロジェクトが当初目指していたもの（一般人の直観を明らかにすること）がどこまで達成できるかは疑問である。

一方、より穏当な立場として、事例の誤解が回答に与える影響を割り引いて実験結果を分析すればよい、という考えもあるだろう。たとえば自由意志の実験哲学の場合、たとえ人々の回答が決定論の誤解に基づいており、ゆえに決定論についての「直観」と呼ぶに値しないものであったとしても、バイパス判断が回答に与える影響を統計的に推測することによって、そうしたデータから理想的な被験者の回答、つまり決定論についての直観を予測できる可能性がある。そうだとすれば、決定論と自由意志の問題に関する人々の回答を調べることは、両立論的直観と非両立論的直観をめぐる問題にとって必ずしも無意味ではないかもしれない。とはいえ、こうした戦略が他の事例における誤解にどこまで応用可能かは定かでない。極端な例を挙げると、七点スケールで与えた複数の理解度チェック（否定的回答が正解）のすべてに対して被験者の99％が7（強く同意する）を選択するといった事例では、事例の誤解が回答に与える影響を分析することは困難だ。一般の人々が哲学的直観をもてないという事態をどのように受け止めるかについては、各分野の実情に応じた個別の考慮が求められる。

6　結論

本論文ではExpertise Defenseに対する二種類の批判のうち、アナロジーの不備を指摘する議論への応答を通じて、Expertise Defenseの正当化を試みた。Expertise Defenseは専門家の判断が信頼されている他領域とのアナロジーを通じ、哲学者の直観が無関連要因の影響から

自由であることを示す論証として提示されてきたが、本論文ではこの論証を、無関連要因に影響されたとしてもなお哲学者の直観が高い信頼性をもつことを示す論証として再解釈した。Expertise Defenseをこのように解釈することで、哲学者の直観もまた無関連要因に影響されるという批判を回避することができる。その上で本論文では、哲学的経験は哲学的直観の産出に寄与していないため、哲学と他領域のアナロジーは成立しないとする批判に対する応答を提示した。本論文で提示したモデルによれば、哲学的経験は哲学的問題の理解に必要な哲学的専門性を養い、特定の問題に対する哲学的直観を可能にすることによって哲学的直観の産出に寄与していることになる。同時に本論文では、この理論的説明が少なくとも自由意志の議論においては経験的なサポートを有していることを明らかにした。本稿の提案がどこまで一般化可能であるかは経験的問題であるが、少なくともいくつかの哲学的領域に拡張可能であると考えられる。

参考文献

・Bealer, George (1996). A Priori Knowledge and the Scope of Philosophy. *Philosophical Studies 81* (2-3): 121–42.
・Bealer, George (1998). Intuition and the Autonomy of Philosophy. In Michael DePaul & William Ramsey (eds.), *Rethinking Intuition: The Psychology of Intuition and Its Role in Philosophical Inquiry*. Rowman & Littlefield. pp. 201-240.
・Bengson, John (2015). The Intellectual Given. *Mind* 124 (495):707-760.
・Bengson, John (2013), Experimental Attacks on Intuitions and Answers. *Philosophy and Phenomenological Research*, 86: 495-532. https://doi.org/10.1111/j.1933-1592.2012.00578.x
・Danziger, Shai, Levav, Jonathan, & Avnaim-Pesso, Liora (2011). Extraneous Factors in Judicial Decisions. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 108: 6889–6892. https://doi.org/10.1073/pnas.1018033108
・Demaree-Cotton, Joanna (2016). Do Framing Effects Make Moral Intuitions Unreliable? *Philosophical Psychology* 29 (1): 1–22. https://doi.org/10.1080/09515089.2014.989967
・Frankfurt, G. Harry. (1969). Alternative Possibilities and Moral Responsibility. *Journal of Philosophy* 66: 829–39.
・Hales, Steven D. (2006). *Relativism and the Foundations of Philosophy*. MIT Press.
・Inarimori, Kiichi, Haruki, Yusuke, & Miyazono, Kengo (in preparation). Folk Intuitions of Free Will and Moral Responsibility: Evaluating the Combined Effects of Misunderstanding of Determinism and Motivated Cognition. *Manuscript in preparation*.
・Inarimori, Kiichi (forthcoming). The Expertise Defense and Experimental Philosophy of Free Will. *Revista de Humanidades de Valparaíso*.
・Knobe, Joshua (2021). Philosophical Intuitions Are Surprisingly Stable Across Both Demographic Groups and Situations. *Filozofia Nauki* 29 (2): 11–76. https://doi.org/10.14394/filnau.2021.0007
・Ludwig, Kirk (2007). The Epistemology of Thought Experiments: First Person versus Third Person Approaches. *Midwest Studies in Philosophy* 31 (1): 128–59. https://doi.org/10.1111/j.1475-4975.2007.00160.x
・Mizrahi, Moti (2015). Three Arguments Against the Expertise Defense. *Metaphilosophy* 46 (1): 52–64. http://dx.doi.org/10.1111/meta.12115
・Murray, Dylan, & Nahmias, Eddy (2014). Explaining Away Incompatibilist Intuitions. *Philosophy and Phenomenological Research* 88 (2): 434–67. https://doi.org/10.1111/j.1933-1592.2012.00609.x

main.indd 98-99 2024/02/07 14:35:30

・Nadelhoffer, Thomas, Murray, Samuel, & Murry, Elise (2023). Intuitions About Free Will and the Failure to Comprehend Determinism. *Erkenntnis*: 1–22. https://doi.org/10.1007/s10670-021-00465-y

・Nadelhoffer, Thomas, Rose, David, Buckwalter, Wesley, & Nichols, Shaun (2020). Natural Compatibilism, Indeterminism, and Intrusive Metaphysics. *Cognitive Science* 44 (8). https://doi.org/10.1111/cogs.12873

・Nahmias, Eddy, Morris, Stephen, Nadelhoffer, Thomas, & Turner, Jason (2005). Surveying Freedom: Folk Intuitions About Free Will and Moral Responsibility. *Philosophical Psychology* 18: 561–84. https://doi.org/10.1080/09515080500264180

・Nahmias, Eddy, Morris, Stephen, Nadelhoffer, Thomas, & Turner, Jason (2006). Is Incompatibilism Intuitive? *Philosophy and Phenomenological Research* 73: 28–53. https://doi.org/10.1111/j.1933-1592.2006.tb00603.x

・Nahmias, Eddy, & Murray, Dylan (2010). Experimental Philosophy on Free Will: An Error Theory for Incompatibilist Intuitions. In Jesus Aguilar, Andrei Buckareff & Keith Frankish (eds.), *New Waves in Philosophy of Action*. Palgrave-Macmillan, pp. 189–215.

・Nichols, Shaun, & Knobe, Joshua (2007). Moral Responsibility and Determinism: The Cognitive Science of Folk Intuitions. *Noûs* 41 (4): 663–85. https://doi.org/10.1111/j.1468-0068.2007.00666.x

・Rini, Regina A. (2014). Analogies, Moral Intuitions, and the Expertise Defence. *Review of Philosophy and Psychology* 5 (2): 169–81. https://doi.org/10.1007/s13164-013-0163-2

・Ryberg, Jesper (2013). Moral Intuitions and the Expertise Defence. *Analysis* 73 (1): 3–9. http://dx.doi.org/10.1093/analys/ans135

・Samuel Schindler & Pierre Saint-Germier (2023) Philosophical Expertise Put to the Test, *Australasian Journal of Philosophy*, 101:3, 592-608. https://doi.org/10.1080/00048402.2022.2040553

・Schwitzgebel, Eric, & Cushman, Fiery (2012). Expertise in Moral Reasoning? Order Effects on Moral Judgment in Professional Philosophers and Non-Philosophers. *Mind and Language* 27 (2): 135–53. https://doi.org/10.1111/j.1468-0017.2012.01438.x

・Sinnott-Armstrong, Walter (2008). Framing Moral Intuitions. In W. Sinnott-Armstrong (ed.), *Moral Psychology, Vol. 2. The Cognitive Science of Morality: Intuition and Diversity*. MIT Press, pp. 47–76

・Tobia, Kevin, Buckwalter, Wesley, & Stich, Stephen (2013). Moral Intuitions: Are Philosophers Experts? *Philosophical Psychology* 26 (5): 629–38. https://doi.org/10.1080/09515089.2012.696327

・Tomasz Żuradzki, & Vilius Dranseika (2022). Reasons to Genome Edit and Metaphysical Essentialism about Human Identity, *The American Journal of Bioethics*, 22 (9): 34–36. https://doi.org/10.1080/15265161.2022.2105431

・Weinberg, Jonathan M., Gonnerman, Chad, Buckner, Cameron, & Alexander, Joshua (2010). Are Philosophers Expert Intuiters? *Philosophical Psychology* 23 (3): 331–55. https://doi.org/10.1080/09515089.2010.490944

・Weinberg, Jonathan M.; Nichols, Shaun & Stich, Stephen (2001). Normativity and Epistemic Intuitions. *Philosophical Topics,* 29 (1-2): 429–60. http://dx.doi.org/10.5840/philtopics2001291/217

・Williamson, Timothy (2007). *The Philosophy of Philosophy*. Wiley-Blackwell.

・Williamson, Timothy (2011). Philosophical Expertise and the Burden of Proof. *Metaphilosophy* 42 (3): 215–29. http://dx.doi.org/10.1111/j.1467-9973.2011.01685.x

注

（1）　本論文の内容は、日本哲学会第82回大会における発表「哲学者の直観は素人の直観より信頼できるのか」および2023 Australasian Association of Philosophy Conferenceにおける発表“The Expertise Defense and Experimental Philosophy of Free Will”を踏まえ、Inarimori (forthcoming) の提案を精緻化したものである。発表当日にコメントをいただいた参加者の方々に感謝申し上げる。また、原稿に対して有益なコメントをいただいたRichard Stoneにも、この場を借りて感謝申し上げたい。

（2）　本稿で扱う直観の定義については匿名の査読者1より多くの有益なコメントをいただいた。この場を借りて深く感謝申し上げる。

（3）　もちろん、このことをもってあらゆる法学上の判断が無関連要因の影響を強く受けていると結論つけるのは性急である。

（4）　Inarimori (forthcoming) では、Contributionのほか「哲学的経験がいかにして直観を無関連要因から自由にするかが説明されなくてはならない」とする要件（Immunity）を提示したうえで、Expertise Defenseにとって重要なのはContributionの充足であるから、Contributionの充足を通じてExpertise Defense一般を擁護できると主張した。しかし、Expertise Defenseは第一の意味でも解釈できる以上、この論証には無理があるだろう。そこで本論文では、Expertise Defenseそれ自体を再分類し、Contributionの充足によって特定のExpertise Defenseを擁護するという方向で論証を修正した。また、Inarimori (forthcoming) ではImmunity要件を経験的に充足されるべき要件として提示していたが、Contribution要件もまた、経験的事実と整合的であることが重要だと考えられる。

2024/02/07 14:35:30

main.indd 100-101